

今週の為替相場見通し(2016年4月11日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		107.67 ~ 111.80	108.08	105.00 ~ 110.00
ユーロ	(ドル)		1.1327 ~ 1.1454	1.1402	1.1300 ~ 1.1600
(1ユーロ=)	(円)		122.55 ~ 127.33	123.23	121.00 ~ 126.00
英ポンド	(ドル)		1.4006 ~ 1.4321	1.4125	1.4050 ~ 1.4300
(1英ポンド=)	(円)	*	151.66 ~ 159.59	152.71	151.50 ~ 155.00
豪ドル	(ドル)		0.7490 ~ 0.7677	0.7549	0.7450 ~ 0.7750
(1豪ドル=)	(円)	*	80.68 ~ 85.80	81.63	80.00 ~ 84.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

為替営業第二チーム 西谷 鷹

(1)今週の予想レンジ: 105.00 ~ 110.00 円

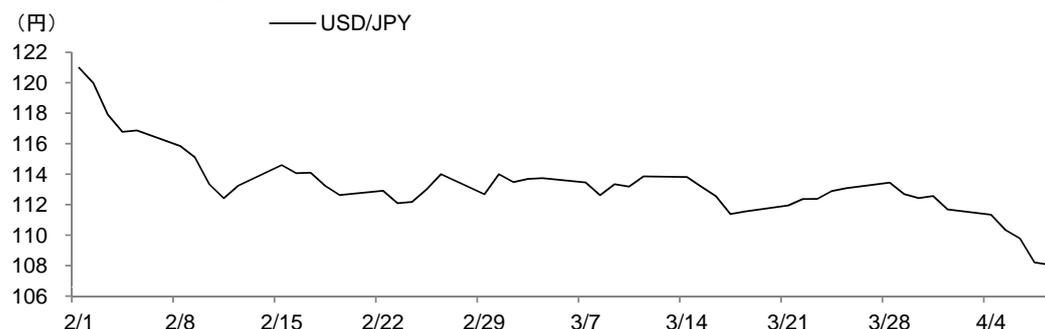
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル円相場は下落する展開。週初4日、111円台後半でオープンしたドル円は、一時週高値となる111.80円をつけるも、材料難となる中、111円台前半で方向感に欠ける値動きに。5日は日経平均株価の下落に連れてドル円も110円台後半まで下落した。その後、安倍首相の米紙のインタビューで、「通貨安競争は回避すべき」と発言したことが伝わると円買いが急速に進み、ドル円は109円台後半まで値を下げた。しかし、米3月ISM非製造業景気指数が良好な結果となり、ショートカバーが一気に持ち込まれると、ドル円は110円前半まで回復した。6日のドル円は、NY時間にドルが売り戻される展開に110円ちょうどを下抜けすると、ストップロス巻き込み109円台後半まで下落。その後FOMC議事要旨の発表を受けて円買いが強まると、ドル円は109円台前半まで下落するも、買い戻しの動きが入り109円台後半まで値を戻した。7日にかけてもドル売り地合は根強く、ドル円は2014年10月31日の日銀追加緩和直前の水準である109.17円を割り、ストップ巻き込みで108円台後半まで下落。その後も米金利が一段と低下する動きに一時108円を割り込み107.67円をつけた。8日はポジション調整の動きに一時109円台を回復する場面が見られたものの、米株が徐々に上げ幅を縮小する動きを受けて、ドル円も108円ちょうど近辺までじりじりと値を下げ、そのまま越週した。

今週のドル円相場は下方向の値動きを予想する。予想以上に速いスピードでドル円は下落し続けている。やはり年初来安値、心理的節目である110円などのテクニカルポイントを立て続けに下抜けたことで、下向きバイアスに勢いがついてきている格好。反転上昇する材料が見当たらない中、しばらくはこの流れが続くものと考えている。こうした値動きの背景にあるのは、投機筋を中心とした円ロングポジションの急速な積み上がりであると思われる。一部では介入警戒感も相応にあったものの、先日の安倍首相の「恣意的な為替介入は慎むべき」との発言により、徐々に下値を試す展開となっている。今週は米国より13日(水)に3月小売売上高、14日(木)に3月消費者物価指数(CPI)、中国においては15日(金)に1~3月期GDPなど、重要指標の発表が控えており、こうした経済指標の内容次第では、リスクオフ進行に伴う円買いが加速する可能性もあることから、十分に注意して臨みたい。また今週末には注目のOPEC加盟国と非加盟国の会合が予定されており、一時期と比較すれば持ち直しの動きが見られる原油相場であるが、依然としてマーケットの懸念材料であるだけに、会合の内容如何によってはリスクセンチメントが急激に悪化するリスクもあり、警戒する必要があるだろう。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き: 安値 107.67 円 高値 111.80 円 終値 108.08 円



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

(1)今週の予想レンジ: 1.4050 ~ 1.4300 151.50 ~ 155.00 円

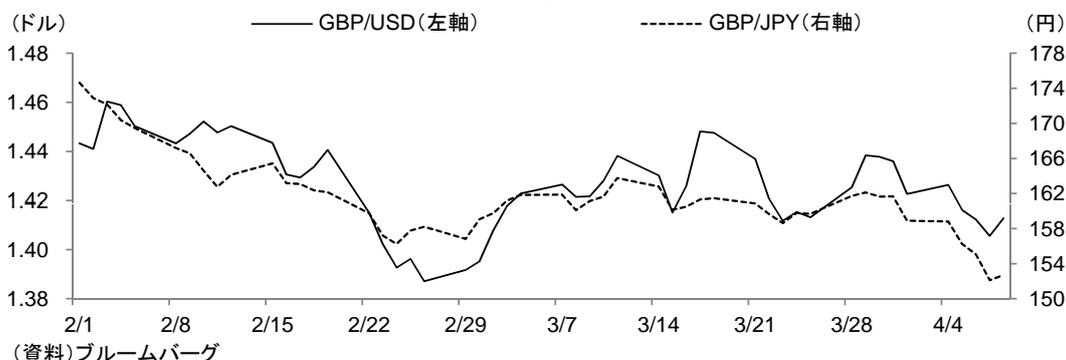
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、主要通貨に対して軟調推移先行からそのまま安値引け。対ドルでは約1か月ぶりの安値までにとどまったが、対円、対ユーロではそれぞれ2年7か月ぶり、1年9か月ぶりの安値まで大きく水準を切り下げた。ポンド売りの要因は、大きく3つ考えられた。①一つ目は、相変わらず、6月の英国民投票に向けて英のEU離脱に対する不透明感が嫌気されたこと。6日発表された一部世論調査では、残留派と離脱派はそれぞれ39%と38%と僅か1%差にまで縮まった。この発表を受け、ポンドは対ドルで1.4016と、一時、週の安値まで下落した。②二つ目は、①とも関わるが、3日以降世界中の注目を集めた、いわゆる「パナマ文書」の中に、キャメロン首相の亡父の名前が含まれたことで、キャメロン首相自身の租税回避が疑われたこと。EU残留キャンペーンを率先する同首相の信用失墜は、単なる政局不透明感の高まりにとどまらず、英のEU離脱のリスクを高める可能性があるとして懸念された。③三つ目は6日に前後した急速な円高進行でポンド/円が155円を割り込み、ポンド売り円買いが相互に助長し合いながら加速したというテクニカルな要因。円高の背景としては、米連銀追加利上げの後退を受けた全般的なドル安に加え、日本株の続落を受けた「リスク回避」の円買いが重なり、ドル/円で110円という節目の水準を割り込んだことなどが重なったことが考えられた。7日以降、特段材料もないままポンドは下げ止まったものの、反発するだけの理由もなく、そのまま安値圏で週の取り引きを終えた。

今週の英ポンド相場は、安値圏での膠着を予想。これ以上のポンド安を見込む要因も考え難い一方、早晚ポンドが明確に反発するだけの材料も思いつかない。上述①に関しては、これまでに、離脱派が残留派を上回る世論調査の結果も複数発表されており、殊更ポンド売り材料視する必然性も感じなかったが、ポンド売りの格好の言い訳にされた感が強かった。②については、キャメロン首相が8日までに、当該資産の存在を認め、「適切な(英)納税をしている」と明言している。それが事実と判明すれば、キャメロン首相に対する批判も、国民投票に対する(残留派の目線での)悪影響も、いずれ沈静化していくものと考えられる。今般の文書発覚はキャメロン首相にとって最悪のタイミングと言えただろうが、それを追求する野党(EU残留を党の方針とする労働党、スコットランド独立党、自由民主党)にとっても、仮に執拗な攻撃が(英国独立党など)EU離脱派を利することになってしまえば「自らの足を撃つ」ことにもなりかねない。適度に矛先を収めるのが賢明と言えよう。いずれにせよ、ここまで強まった(EU離脱に対する)警戒感が、6月23日の国民投票実施日前にきれいに払拭される可能性は考え難く、ポンドの明確な反発も想定し難い。他に今週は、12日(火)に英3月消費者物価指数、14日(木)に英中銀金融政策委員会の決定、同議事録という重要な英要因の発表が控えているが、英中銀は基準金利の0.50%据え置き、資産購入額上限の3750億ポンド維持予想は揺るがないところで、その限りであればポンドが材料視することはないであろう。したがって消費者物価指数も、余程予想外の数字でも出ない限りポンドの値動きにつながる可能性は考え難い。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き: (対ドル) 安値 1.4006 高値 1.4321 終値 1.4125
(対円) 安値 151.66 高値 159.59 終値 152.71



4. 豪ドル

(1) 今週の予想レンジ: 0.7450 ~ 0.7750 80.00 ~ 84.00 円

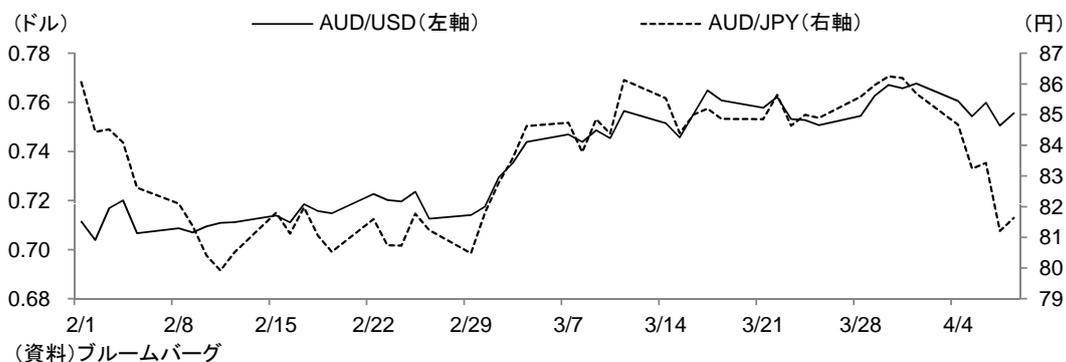
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は軟調な値動きが継続した。週初4日、豪ドル相場は弱含んだ。対ドルで0.76台後半、対円で85円後半にてオープン。豪2月小売売上高など、豪経済指標が軟調な結果となったことを受けて、翌日に控えた豪州準備銀行(RBA)理事会にて豪ドル安誘導が強まるとの見方から豪ドルは売られ、0.76付近、対円で84円半ば付近まで下落した。翌5日はRBA理事会の結果を受けて一時反発する場面も見られたが豪ドルの上昇幅は限定的となった。朝方発表された豪2月貿易収支において、赤字額が市場予想を上回ったことから対ドルは0.75台後半、対円では84円割れまで下値を切り下げた。続くRBA理事会では、政策金利が2.00%に据え置かれ、声明文では「低インフレが続く、かつ需要を支援する上で適切であるならば、追加緩和に踏み切る可能性がある」と示されたが、豪ドル高けん制するには弱い文言と受け止められ、豪ドル/ドルは0.76前半まで、対円は84円半ばまで買い戻される場面も見られた。しかし、海外時間に入ると軟調な欧州株やドル/円の下落を背景に豪ドル売りが再び強まり、対ドルは0.75近辺まで、対円は82円後半まで反落した。6日は反発。原油相場の持ち直しやこの日発表された中国財新(Caixin)PMIが良好な結果となりリスクオンムードが豪ドル買いを後押ししたことで、豪ドルは0.76台前半まで買い戻された。対円では83円台半ばまで戻したが、ドル/円が市場のセンチメントと相容れない形で節目の110円を割り込んで下落したことから同レベルにて膠着した。7日は反落。序盤は前日の流れを引き継ぎ堅調推移したが、銅相場が大幅下落するなどリスクオフ地合いに転じたことで豪ドル売りが優勢となり、対ドルでは0.75割れ、対円では80.7円近辺まで週最安値を更新して大きく反落した。8日に入り、豪ドル相場は落ち着きを取り戻し、対ドルで0.75台半ば、対円で81円台半ばにて越週した。

今週の豪ドル相場は先週までの調整相場から反発し、レンジを上抜けすると予想。先週は豪経済指標の軟化や銅相場下落の煽りを受けて、上昇相場における調整局面として豪ドルが反落したという認識。対ドルは節目の0.75までレベルを切り下げていることから、下値達成感が拡がり、下落は一服するだろう。また、年初から続く豪ドル相場の反発は、米利上げに対する期待の剥落と利上げペースが緩やかになるとの思惑を背景としたドルインデックスの反落が影響していると考えており、米金融政策における方向性の転換(利上げを矢継ぎ早に行うなど)が見られなければ、ドル売り豪ドル買いの流れは今後も継続すると考えている。今週予定されているFRB高官による発言が気になるところだが、昨今のFRB高官による発言を横目にイエレンFRB議長が慎重な姿勢を維持していることが、中期的なドル売り基調を維持させるだろう。先週のRBA理事会にて追加緩和が示唆されているが、FRBがハト派寄りになる中、その他の国の金融緩和策が為替相場に与える影響が剥落してきていることは明らかであり、またRBAは追加緩和を豪ドル高抑制の切り札として温存するとも考えられるため、追加緩和期待を背景に一段の豪ドル安を期待するのは難しいだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/4~4/8)の値動き: (対ドル) 安値 0.7490 高値 0.7677 終値 0.7549
(対円) 安値 80.68 高値 85.80 終値 81.63



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。